

さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌うこと、教えを説くこと、物語
を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、それぞれ備えて集まることに
しなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなさる 尊き方、
私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、
その「良い知らせ」の そのものの物語。

さらにそこを発って、イエス様はいよいよ、ユダヤと呼ばれる首都圏
に進み、ヨルダン川東側に入って行かれました。また、大勢の有象無象
の人々がついてきました。いつものようにイエス様は、その人々に色々
なことを教えておられました。それはこんな感じでした——

「ファリサイ（分離）派」と呼ばれた人々がやってきて、「答えてくだ
さい」とイエス様に聞きます。「男が女を離婚することは、正しいこと
でしょうか？」それは、「危険思想」を持っていると疑われるイエス様の、
その言葉尻を掴んでやろうとしての質問でした。イエス様はこうお答え
になりました。「旧約聖書の中で、モーセは、どう掟に定めていました
か？」すると「『ちゃんと文字で離縁する旨を書き記し、そして女を去ら
せる』という風に、モーセは離婚を認めているようです」とファリサイ

派の人たちが答えました。するとイエス様はこう言われました。「モーセは、あなたがたが頑固だから、そのように定めたのです。しかし、天地創造の最初、神が雌雄^{しゅう}の別をお定めになった、と聖書にありますでしょう。そして『人はその父母のもとを去り、その妻と一つにつながる。二人は一つの肉体となる。従って、夫婦はもう二人ではなく、一つの肉体である。神が一つにした。人はそれを引き離してはいけない』と、ギリシア語訳の創世記2章24節にありますね。」

家に入ってから、お弟子さんたちはこのお話が気になって、イエス様に尋ねました。それでイエス様はお弟子さんたちにこう教えるのです。「誰でも、自分の妻を離縁して追い出し、別の人と結婚する者は、不貞を働いたことになります。妻が夫を離婚して追い出して別の人と結婚しても、同じです。」

そこに、誰かが子どもを連れてきました。イエス様に触っていただく、というのです。でも、お弟子さんたちは子どもたちを叱りつけました。それを見てイエス様は腹を立て、そしてお弟子さんたちを叱りつけて、言いました。「子どもたちが私の所に来れるようにしておきなさい。――邪魔をするな！ この子たちこそ、そしてこの子たちのような立場の人こそが、神様がお心を砕いてくださる場所で、安心していられる人たちなのです。アメン！ この子たちが居場所を確保する、そのようにして神様のそばにいないなら、絶対に『神の国』になど、入れはしないのです。」そう言って、イエス様は子どもたちを腕に抱きあげ、その一人ずつに手を置いて祝福しておられました。

イエス様が道へと出て行かれますと、一人の人が走って来て、イエス様のそばに膝をついてこう尋ねました。「正しい先生、どうしたら、いつまでも生き活きと生きていられるようになれるのでしょうか。何をご先祖から引き継げばいいのでしょうか？」イエス様はこうお答えになりました。「私のことを、どうして、『正しい』というのですか。神様だけが『正しい』お方でしょう。だから、神様の言葉に、何と書いてあるか、思い出してみましょう。『殺すな、姦淫するな、盗むな、公の場所で偽証するな、どん欲に騙し取ったりするな、父と母を敬え』ですね。」すると

この人はイエス様に答えました。「先生、私はそれを、子どもの頃から守ってきました。でも、どうも、ダメなのです。」この大金持ちの人は、見るからに立派な服装をし、上品な物腰で、でも、悩んでいます。その様子をじっと見つめながら、イエス様はこの人をととても好ましく思いました。この人なりに、自分の限界と誠実に向き合っている。イエス様はこう言いました。「なるほど。でもひとつ、欠けているのです。さあ、やってごらんなさい。お持ちのものをお金に変えて、それを貧しい人にあげてしまうのです。そうしたらわかります。天に宝を積む、ということです。そして、私と一緒に行きましょう。」この言葉に、この人は顔を曇らせました。なんで、自分が幸せではないのか、分かったのです。でも、「それはできない」と思いました。幸せになる方法が分かったけれど、それは、自分には無理だ――これは実に残酷な現実と思われて、悲しい思いに満たされながら、この人はその場を立ち去って行ったのでした。この人は実に大きな財産を持っていました。それが、彼の悲しみの源となったのでした。

イエス様は周りを見渡ししながら、お弟子さんたちにこう言いました。「神様が喜ぶ世の中に入ることは、金持ちや資産家にとって、なんと難しいことなのでしょう。」お弟子さんたちは面食らってしまいました。生活に余裕のある人でも、幸せになれないのか・・・そう思って当惑しているお弟子さんたちに、イエス様はこう言葉を続けました。「どうしました。神様の子どもたち。神様が喜ぶ世の中に入ることは、何とも難しいことです。豊かな人が『神の国』に入ることよりは、ラクダが針の穴を通ることの方が、簡単であるようです。」



いよいよお弟子さんたちは混乱してしまいました。「では、誰が幸せになれるのでしょうか・・・」そんなお弟子さんたちの顔を、やっぱりイエス様は、じっと見つめます。あのお金持ちの人の顔を見つめたのと同じように。そして、こう言われました。「幸せになることは、人間の手に余ることです。でも、神様の御手に余ることではありません。神様には、どんなことでもできるのです。」

すると、ペテロが言いました。「見てください。私はすべてを手放して、ついてきました！」そこでイエス様はこうお答えになりました。「アメン！あなた方に言っておきます。私のために、そして私の知らせた良い知らせのために、自分の家、兄弟、姉妹、母、父、そして子どもたちあるいは土地などを手放した人は、たくさんいますね。その人たちが報われないということは、無いのです。まさに今、その手放したものの100倍もの報いを、あなたたちは受け取っているでしょう。つまり、新しい家・新しい家族が、天の御父上様として私たちを慈しむ神様から、必ず与えられているのです。ただ、それを受ける時、あなたたちは迫害も一緒に、受けているはずです。そして、この後、その内の誰一人として、いつまでも生き生きとしていられるいのちを与えられない人はいません。ただし、この格言は覚えておいてください——先の方は後になり、後の人は先になる、ということです。」

イエス様とお弟子さんたちは旅の途中にありました。イエス様が、お弟子さんたちを引き連れて進んだのでした。その様子は決然として、お弟子さんたちは驚き、そして不安になったのでした。イエス様は、また——今度は三度目になります——12人のお弟子さんたちをお集めになり、そして「これから起こること」を、このようにお話になったのでした。「いいですか、私たちは首都エルサレムに上って行くのです。そして『人の子』は『長老・祭司長・学者』と呼ばれた人々（つまり、イエス様の時代のイエス様の国で権力を分け合っていた人々のすべて）に引き渡され、死刑判決を受け、そしてあの穢^{けが}れたローマ人たちに引き渡されることになります。ローマ人たちは『人の子』を嘲^{あざけ}りからかって、唾を吐きかけ、そして殺すでしょう。それから『人の子』は、三日後によみがえることで

しょう。」その時「お願いがあるのですが」と、お弟子さんたちの中からヤコブとヨハネ（つまり、網本ゼベダイの家の息子たちで、故郷にいれば手に入れた大きな財産を手放した二人）がイエス様の所に来て言いました。「かなえて頂けますでしょうか？」イエス様は答えて「何でしょう？」と言いますと、二人はこう言いました。「先生が栄誉に輝くその時に、私たちをそれぞれ、先生の右と左の席に座らせていただきたいのです。」イエス様はつい先ほど、「迫害と一緒に報いを得ます」とおっしゃっていたのに、そんなことは、まったく耳に入っていない二人でした。イエス様はこう答えました。「あなたたちは、自分が何を言っているか、分かっていませんね。では、聞きましょう。あなたたちは、私が飲む盃から飲み、私が受ける『沈めの儀式』を受けることができますか？」二人は「できます」と答えました。イエス様はこう言いました。「では、あなたたちは、私が飲む盃から飲むといいでしょう。私が受けている『沈めの儀式』を、あなたたちも受けることにしたらよろしい。ただ、誰が私の右の席に座り、また誰が左の席に座るのか、神様の栄光の時の席次について、私には決定権などないのです。ただ、決められた席次に従って、着席すべき人が着席するだけです。」当然ですが、残りの十人のお弟子さんたちは、ヤコブとヨハネのことで腹を立て始めました。そこでイエス様は 12 人のお弟子さんたちをみんな集めて、こう言うのです。「ローマ帝国のように、人々の上に君臨して指導者となり、人々を支配する連中がいますね。その連中の中の強い者・高位高官の人々が、なんだかんだと威張り散らしています。でも、あなたたちは、そんなことではいけません。大きな顔をしたいと思うなら、どこまでも小さくなって奉仕するべきです。『プロートス（第一の者）』と呼ばれる人が、役所でも軍隊でも支配し威張り勝手にふるまっているのを見て、それに憧れているなら、『デューロス（奴隷）』になってみんなに仕えればよいのです。いいですか、『人の子』が来たのは、奉仕してもらうためではありませんでした。そうではなくて、奉仕するためでした。身代金として自分自身を投げ出して、多くの人々を助け出すためでした。」

一行はエリコに来ました。ここは首都エルサレムから 40km くらい北東にあって、昔から町があった交通の要衝地でした。イエス様が到着した頃も、ローマ風の都市がそこにありました。そこでの用を済ませて町を出て行くとき、やはりお弟子さんたちの他にずいぶん多くの有象無象の人々がついてきてしまいました。その時、そこに盲人で物乞いをしている人が座っていました。「テマイオスの息子」と呼ばれているバルテマイオスという人でした。「ナザレ人イエスがいる」と聞いた彼は、大声を上げてこう言いました。「『ダビデの子』であるイエス様！私にも恵みを与えて下さい！」多くの人が彼を叱りつけて黙らせようとしてしました。しかし、いよいよ激しく、彼は叫び続けました。「『ダビデの子』であるイエス様！私にも恵みを与えて下さい！」イエス様は足を止めて、そして「彼を呼んできてください」と言いました。人々はこの盲人に「もう大丈夫だ。さあ立って。先生がお呼びだから」と言いました。するとバルテマイオスは、ただ一つの持ち物である上着（昼間は敷物となり、寝る時には寝袋となって重宝する、彼の全財産そのもの）をそこに投げ出して、立ち上がり、イエス様の所へやってきました。イエス様は彼に答えてこう言いました。「私に何をしてほしいのですか？」すると盲人はこう言いました。「先生、また目が見えるようになりたいのです！」イエス様はこう答えました。「さあ、行きなさい！あなたが信頼してくれたから、あなたの目は治ったのです。」するとすぐ、バルテマイオスの目は見えるようになりました。そして彼は、道々イエス様について行ったのでした。

